

第5回 富田林市金剛地区再生指針策定協議会 議事概要

1. 開催概要

○日時：平成29年3月22日（水）午後2時～4時

○場所：富田林市役所3階 庁議室

○出席者

◆協議会委員 17名

友田委員、中井委員、溝口委員、山田委員、吉村委員、増田委員、小野委員、原山委員、寺田委員、藤本委員、中谷委員、市川委員、中西委員、和田氏（東委員代理）、井筒委員、藤原氏（三崎委員代理）、北野委員

◆事務局 5名

坂本次長（まちづくり政策部）

仲野次長代理兼課長、尾崎課長代理兼政策係長、坂口地域整備係長、竹内（まちづくり推進課）

◆コンサルタント 2名

小倉、西村（株式会社市浦ハウジング&プランニング）

◆傍聴人 2名

○当日の流れ

① 開会

② 議事

（1）パブリックコメントの結果について

（2）金剛地区再生指針（案）について

（3）来年度以降の取り組みについて

③ 閉会

2. 当日の様子



3. 議事

（1）パブリックコメントの結果について

（質疑、意見等は特になかった）

(2) 金剛地区再生指針（案）について

- 今後、「（仮称）金剛地区まちづくり会議」（以下、まちづくり会議と呼ぶ）が実動するかが重要である。実質的にだれがワーキンググループなどをつくり、議論していくかイメージをもつべきではないか。また、地域で活動する団体や住民がいるので、その人たちの声も聞きながら進めることが重要である。
- 再生指針（案）は、ボリュームのある内容となっており、また多くの課題の解決策が盛り込まれた指針となっている。ここに示された取り組みを実現するために、重要性や効果、取り組みやすさなどを指標として、優先順位をつけていくことが今後の課題ではないだろうか。
- 本協議会の議論で、地域の課題はいっぱいあると感じた。今後、形となる取り組みが一つ一つ生まれてくればよい。また、その結果を評価しながら、取り組みを進めることができればよい。
- 再生指針（案）としては、よくできた指針となったと思うが、総花的であるとも感じるので、取り組みの優先順位を決め、また議論するワーキンググループをつくるのが今後の課題である。事業者の立場としては、収益性も大切なので、その点も考えながら取り組みを進めることができればよい。
- 本協議会の事務局であるまちづくり推進課は、地域にもよく足を運んでくれており、再生指針（案）に位置づけた取り組みを実現してくれる担当課だと期待している。
- 住民が地区活性化に向けて、具体的に何をすればよいか示すことを、今後考えなければならぬ。そのためには、住民自身が活性化に向けて取り組もうという思いを持ってもらえるようにすることも重要である。
- 再生指針（案）では、一定、活性化に向けた具体的な方針が示されたと感じている。UR都市機構としても、この再生指針で位置づけられた方針、取り組みを意識しながら、団地・コミュニティの活性化に取り組んでいきたい。
- 再生指針（案）には、本協議会や意見交換会での意見がすべて反映されたと感じている。活性化に向けて、取り組みの優先順位をつけていくことも重要である。また、取り組む内容も大切であるが、広報に力を入れることも大事である。同時に、いろんな方に参加してもらえるようにすることも重要である。
- 誰が取り組むのが重要である。地域には、老人クラブや民生委員など、様々な団体等があるが、高齢化や人口減少の中で、優先順位をつけて、地域みんなで同意して進められるようにすべきである。
- 私自身、一年間の議論を通じて、金剛地区の良さも再認識できたと感じている。第5回意見交換会では、来年度以降のすすめ方を議論したが、取り組みごとにチームを組んで、どのような話し合いをするのか、具体的なイメージをもつことができた。その中で、活性化に向けた歩みを進み始めているという気持ちをもつこともできた。ただし、“良くなった”と思えるものが具体的に出てこなければ、展望を持つことができないので、何か地区が“変わった”と思えるものを実現することが重要である。地区では、高齢者等の移動が一番の課題だと考えているので、コミュニティバスの運行などをまず始めてはどうかと思う。同時に、保育所などの子育てに関する施策も進めるべきである。このような取り組みを実現するためには、取り組みごとのチームづくりが必要である。

- 再生指針としては、立派なものがあったと思うが、良くも悪くも教科書的に見える。金剛地区だからこのような再生指針があったのか、一般的な再生指針となっていないだろうか。金剛地区の特異性のある再生指針となれば、もっと良かったと思う。都市再生のためには、ソフト・ハードの両面からの取り組みが必要なので、事業者としては、この再生指針を1つのきっかけとして、一致団結して取り組みたい。
- これまでの意見交換会での意見が網羅された再生指針となっているので、総花的、抽象的なものとなったのはやむを得ないと考えている。まずは、例えば防犯面では地域でどのような活動をしているか、金剛団地にある防犯ベルがどのような役割でどのような作動をするかなど、実際に地域にある活動等を行政も知ってほしい。再生指針で位置づけた取り組みは、行政や住民の責任として、具体的な中身をふくらましていきたい。
- これまでの議論がきちりと反映された再生指針となっており、よいものになったと考えている。これからは、これまで無関心だった方も含め、いろいろな方に地区活性化の取り組みに参加してもらうことが大切である。プロジェクトの議論の仕方、参加者、役割、取り組み方、また広く住民が参加できるしくみをつくりあげていきたい。まずは、取り組みやすいものをリーディングプロジェクトとしてもよいのではないだろうか。
- 再生指針（案）で位置づけた取り組みをどのように実践するか、まちづくり会議で議論しながら、実績をつくりたいと考えている。まず取り組んでみて、その中で人材を発掘できればよいのではないか。
- 再生指針（案）は、総花的だという意見もあったが、さまざまな分野の地域団体等の活動や意見を伺ったので、それを具体的に書き込むことができた結果だと考えている。まずは、取り組みやすいことから始めることができればよいのではないだろうか。ただし、参加者それぞれの志向や取り組みやすさなどが異なるので、必然といくつかのプロジェクトづくりができると考えている。
町会等では、再生指針をあまり知られていないので、広報が重要であり、また町会等の役割も考え、子どもらも巻き込んだ取り組みをつくることができればよいのではないだろうか。
- 再生指針（案）は、総花的だという意見があったが、金剛地区の課題等は、特定の地域だけでなく、全国のニュータウンで多発的に社会問題として顕在化するものであるため、一定の共通性を持つことはやむを得ないのではないか。これまで、地区の魅力と課題を十分に議論いただき、その課題の解決方法、持っているポテンシャル（魅力）をどのように顕在化させるかということを示すことができたと考えている。
- 活性化の取り組みについて、優先順位を決めたほうがよいという意見もあったが、取り組めることから始めてもよいのではないだろうか。まちづくり会議は、プラットフォームとしての役割もある。プラットフォームというのは、自由な参加の中で、自由に情報や意見交換ができ、意気投合して自由な活動ができ、プロジェクトチームができあがってくるというような、行動の起点となるのではないだろうか。例えば、ホームページをつくるのが好きな人、イラスト表現が好きな人、写真撮影が好きな人、文章表現が得意な人などが集まってくれば、住民に取り組みを知らせるためのニュースレターをつくることことができる。このように、共通のテーマを持ったさまざまな人が集まってくれば、プロジェクトチームができあがり、取り組み（行動）が出てくるのではないだろうか。

- 小さくても取り組みの成功例をつくることができれば、またそれに誘発されて何人かが集まり取り組みができあがるというような、連鎖的にさまざまな取り組みが生まれてくる。まずは、肩に力を入れすぎず、何ができるかということから議論して始めてはどうか。
- 事業性の確保は課題であり、どのようにして経済活動に結びつけるかは重要である。すべてがサービス型・ギブ（与える）だけでは、活動者に負担になってしまい、取り組み自体が続かない。取り組みを進める中で、ウィンウィンの関係をつくり、継続性を持つということも大切である。
- 互いに財産を守り、命を守るか、家の価値を維持するか。このような観点から、みんなでどう価値を高めるかという意識も持つておくべきである。
- 再生指針（案）は、協議会において了承され、協議会の会長・副会長から市長に手渡された。
- 今後も金剛地区が魅力的なまちとなるよう、再生指針（案）の推進について、特段のご高配をいただくようお願い致します。（会長）

（3）来年度以降の取り組みについて

- 大学との連携について、大阪府立大学では「府大ご近所サミット」というものを立ち上げている。大阪府立大学は、行政区域の境にあるが、周辺の自治会や福祉委員会等に呼びかけて、区域をまたいだつながりをつくり、地域の課題等を考えようとしてきた。このように、大学をキーとして、おもしろい取り組みを展開することも考えられるのではないだろうか。
- キックオフイベントは、再生指針のお披露目会としてさまざまな人に参加いただくことを考えてもよいのではないだろうか。大阪府立大学では、最近ボランティア市民活動センターを立ち上げたが、まず知ってもらうことが重要だと考え、講演会を開催した。このように、金剛地区なりに、周知するためのイベントとしてもよいのではないだろうか。
- 意見交換会メンバーは、町会等からの推薦を受けた住民である。地区内のNPO等の地域団体が活動のキーにもなると考えているので、ぜひ参加いただき、一緒になって議論を深めてプロジェクトをつくっていききたい。
- 大学との連携について、金剛団地自治会では大阪大谷大学などの学生に、団地に入居してもらえないかと検討している。行政、UR都市機構、大学、自治会が連携して、家賃の補助をするなどして学生の入居を支援し、地域のコミュニティに参加してもらえないかと考えている。また、集会所などを使って、地区内で大学のカリキュラムを展開することができればよい。
- キックオフイベントについては、住民に再生指針の具体的な内容が伝わっていないので、住民に広く周知するような機会としたい。
- 大学との連携について、大阪府内の民生委員で昨年より取り組みを始めている。昨年、7自治体が連携して、4大学の21名の大学生に民生委員の活動を知ってもらうために、一緒に地域を回った。来年度は、さらに取り組みを広げ、12自治体が9大学（約90名の大学生）と連携する予定である。この取り組みでは、民生委員の仕事を知ってもらうだけでなく、一緒に地域を回ることで、地域のことを知ってもらう機会にもなると考えている。
- 地区内には、すでにどのような活動があるか知ること重要である。取り組もうというテー

マがあったとしても、実はすでにある活動をつなぎあわせればできることもあるかもしれない。

- 市役所庁内の体制について、再生指針の策定を担当したまちづくり推進課以外にも、関連する課がさまざまあると思う。これらの課が同じ方向を向いて、整合性を持ってもらうために、各課にも参加いただきたいと考えている。今後は、そのような形で動いてもらえるという認識でよいか。

→ 庁内では、すでに関係課の部・課長級が集まった会議体を組織しており、情報共有してきた。今後も継続したいと考えている。(事務局)

→ 課長級だけではなく、現場に出る担当者の方も共通認識を持つことが重要ではないか。

- キックオフイベントについて、多くの住民らに参加してもらえるように、金剛地区にゆかりのある有名人を招いてはどうか。
- 行政の計画は、住民への周知が課題となるが、庁内での周知も課題である。庁内で説明会等を開催し、計画の説明を行い、また本協議会の思いを伝えることが大切である。そうすることで、具体的にプロジェクトが立ち上がった段階で、各課にも参加してもらえるようにしたい。
- プロジェクト等に関連する担当課が同じ方向を向いてくれるようになれば、本協議会の事務局であるまちづくり推進課がすべての会に参加する必要もなくなる。庁内で説明会を開催するなら、ぜひ現場に出る担当者も参加すべき。
- プロジェクトの内容について、先ほどコミュニティバスの運行をしてはどうかという意見があったが、コミュニティバスは、どの自治体でも維持が難しくなっている状況である。ボランティアタクシーなど、自治会等のコミュニティベースで考えるのも一つの案ではないだろうか。

→ モノやヒトを動かすということはとてもお金がかかる。商業事業者の立場として、宅配等を行おうとすると、(人件費を)ゼロベースで考えても、利用者に何らかのご負担をいただければ難しい。

→ 先日、福祉移送サービス運転者ボランティア養成講習会に参加して資格をとってきた。この資格をとれば、これまで法規制によって規定されていた運賃の制限から、タクシー運賃の半分までなら運賃をとってもよいことになる。有志で資格をとり、チームをつくってもよいのではないだろうか。市でも、講座を開催するなど、取り組むことも考えられるのではないだろうか。

- まちづくり会議については、地域団体としてぜひ参加したい。
- KJ法という会議の方法があるが、人の意見を否定しない、出た意見に対してどうすれば実現できるかなど、アイデアを足し算する方法である。本日も、さまざまな取り組みのアイデアが出されたので、さらに足していってプロジェクトを生み出すことができればよい。
- 参加してみたい気はあるが、どっぴりつかるのは難しいという人は多い。取り組みにライトに参加できる人を引き込むのが、肝になるのではないだろうか。例えば、地域サポーターの登録制度などを用意して、情報をメルマガで発信するなど、ほしい情報を取捨選択してもらえるしくみがあればよいのではないだろうか。このような情報発信が、行動を生み出すきっかけになるのではないだろうか。

→コアメンバー（企画から運営まで行う）、クラブメンバー（運営を手伝う）、ビジターメンバー（気に入った企画のイベント等のみ手伝う）というようなしくみをつくって、関わり方の余裕をつくることも一つの案ではないだろうか。

- 来年度、本協議会の設置要綱を変更し、地区活性化の取り組みを推進するための推進協議会とすることが決まった。
推進協議会については、来年度2回程度の会議を開催する予定である。（事務局）
- まちづくり会議については、4月から町会等とも話しながら組織づくりをする予定である。またメンバーには、本協議会委員である、地区内のNPOや事業者にも参加いただきたい。（事務局）
- まちづくり会議は、来年度のできるだけ早い段階で、開催してほしい。また、会議の進行などもメンバーで担えるようにしてはどうか。

4. 閉会

- 協議会委員のみなさまには、計5回の会議に出席いただき、活発なご議論をいただき、ありがとうございました。金剛地区のまちづくりは、今後の本市のまちづくりの柱となると考えており、また金剛地区再生指針をもとに地区の活性化、本市のさらなる発展につなげたい。協議会委員をはじめ、住民、地域団体、関係事業者、大阪大谷大学大学生など、みなさまからご意見をいただき、誠にありがとうございました。今後は、みなさまをはじめ、地区に関わるすべての人・団体等が金剛地区再生指針を共有しながら、まちづくりの担い手となっていただくことを期待しているところである。本市としては、地区の活性化に精力的に取り組むとともに、地域のみなさまによる活動も積極的に支援したい。
富田林病院の建替えについては、5年近くの歳月がかかり、ご辛抱いただくこととなるが、必ずみなさまに喜んでいただける病院となるよう取り組んでいく。（市長）